
擬似犯罪

榎 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

擬似犯罪

【Zコード】

Z7534E

【作者名】

檻 麻容

【あらすじ】

『矛盾犯罪』『予定犯罪』のその後。この話だけでも読みます。

犯罪が、呉の過去を引き摺り出す。紅い過去は色褪せないまま脳裏に焼き付いていて。超能力者が関わったとき、現実が鮮明に見えた。

紅が。臭いが。

手にこびりついているようで。
追いかけてくるようで。
責められているようで。
許されたいなんて思わないから。
幸せを願つていいですか？

「呉さん！」

若い男の声で意識がはつきりした。いつの間にか眠つてしまつて
いたようだ。ソファーの背もたれに体重をかけて一息吐いた。

大丈夫、いつも通りにいける。

顔を上げると、心配そうに見ている後輩と田が合つた。

「何？」

「大丈夫ですか？」

居眠りしていたことを指摘せずに心配した後輩、柴田耕平にすぐ
に返事ができなかつた。

いつも通り振る舞えているはずだ。何がおかしいのか。

「何が？」

「調子が悪そうに見えます。呉さんポーカーフェイスだから、微妙
な変化は目立つんです」

「まあそれは耕だからわかることなんだろうけどね」

耕の後ろから悪友、水野が缶コーヒーを投げた。それを右手で受け、すぐにブルトッپを引いた。喉が渴いていた。それは夢のせい
かわからないけど。

一口飲むと、頭がすつきりするのを感じた。今は仕事中だ。素早く眠気を振り切つて切り替えた。

「大丈夫だよ。で、死因は？」

「窒息死。首の絞殺痕がそれだよ。で、刺し傷は死後のものばかり。ああ、でもまた窒息するまでに大量の水を飲まされてるね。その中に金魚がいた」

「前の三件と同じ、か」

手口が同じだった。絞殺後に滅多刺し。絞殺前に大量の水を飲ませてその中に金魚。連續殺人事件だ。しかも無差別の四件目。まだ続くだろう。終わりがわからない。

2 能力

「吳さん、零くんたちに頼んだ方が良いんじゃないでしょうか？」

「いや、まだ」

「もう、ですよ。僕が『過去』を見ますので、遺留品を貸してください」

水野の後ろから過去透視者、速水零はやみれいが現れた。

過去透視。モノに触ることで、そのモノの周りの過去の光景が頭の中で再生される。犯行現場にあつたものを触れば犯人なんてすぐわかる。その犯人の顔を再現するのは一苦労だが、確実に真犯人を知ることができる。

しかし、それには負担が大き過ぎた。犯人を知るというと、これは犯行を目撃するということで。

「零……」

「覚悟なんてこの能力を自覚したときからしてるんです。過去は終わったことで、どうすることもできない。ただ、覗き見ているだけでした」

「それは……」

フォローする言葉は出てこなかつた。何を言つても嘘になる。零の能力を理解できても体験することができない。わかつたふりはしだくなかった。

零はいつもと変わらない無表情のまま話した。

「結局僕は犯行を見るだけしかできないんです。合法的に犯人を捕まえられるのは、吳さんと柴田さんなんです」

一旦言葉を切つた零は、穏やかに笑つた。

「僕の能力が人を救う力になれる 것을 증명してください」

視線が突き刺さつた。零の答えを待つ視線と耕の判断を待つ視線。水野は面白そうに見ていた。

見せたくないと思うのはエゴで、見ることを望むのはプライドで。

零が進んで引き受けたるなり、全てを背負つ覚悟はある。

「零、君を力を借りたい」

「わかりました」

契約に似た約束が成立した。

3 犯行

「犯行現場はビルみたいですね……倒産した会社かな。被害者を勧誘し、睡眠薬で眠らせた後、手と足を拘束。三日間監禁した後、水を管を通して飲ませ、その中に金魚を入れて、絞殺。その後、遺体を別の場所に運んでいます」

「うん。胃の内容物から監禁、手足を拘束されてた痕でその辺は証明できるね。あとは、衣服の付着物で場所が特定できるかな」

水野は検死結果を纏めたファイルを指した。

被害者の服に触った零が説明したのは『服の周りで起こった出来事』だった。監禁されてから服を取り替えていなかつたため、事件の全貌が見えた。

被害者は勧誘された。だから、睡眠薬を飲ませるのは簡単だつた。応接で飲食を提供するのは当然だ。そして、犯行現場と遺体発見現場が違うことはわかつていたが、まだ場所は特定できていない。しかし、零なら現場を見ているため、特定できる。そこには何か証拠が残つているだろう。

被害者の服を触る零の表情は変わらない。まだ何かを探つていた。それは慣れているからのようだ。

慣れるほど、こんなものを見てきたのか。

「吳さん、犯人は女です」

耕が急いで資料をめくるのを横目で見た。警察は今、『犯人は男』と断定しないながらも方向を示していた。しかし、零が見た犯人は女。『女性』ではなく『女』と言つたことに零の怒りを感じた。

「性的暴行があつたから、犯人は男だと思い込んでいたんですね……。犯人の体液は見つかっていません」

耕が読み上げた資料は既に目を通していた。被害者は全員女性で、殺害前に性的暴行を受けていた痕があつた。だからこそ、犯人は男だという先入観があつた。しかし、そんなものは偽装できる。

服を広範囲に触れていた零は、一点で動きを止めた。そこだけ時間が止まったようで。信じられない、とでもいうような表情で。

「唯…？」

零の口から漏れた名前は、よく知る少女のものだった。

「唯
？」

「犯人の残留思念です。その中に唯が…これほど強く残っていると
いつことは
「次の被害者は唯かもしれない」

零は頷き、すぐに携帯電話を取り出した。

少しでも早く。漏れ聞こえるコール音に鼓動が速くなつていぐ。

『零？』と小さく聞こえた声は少女のものだった。

「唯？ 今どこにいる？ …家。亮は？ …そう。じゃあすぐに亮
と一緒に水野医院に来て。今すぐに」

に、を言い終わる前に零は通話を終了させた。相手の何故？ や、
どうして？ の疑問はいらない。そんな時間が惜しいくらい、今は
早く唯を保護したかった。

「唯は亮と家にいたようです。亮が一緒なら、ここに来るまでは安
全です」

亮。麻生亮は零と同居しているサイコキネシスだ。彼は手を触れ
ずにモノを動かすことができる。用心棒には最適だった。唯に近寄
るモノ全てを排除できる。零の電話で、亮も警戒しているだろう。
「唯ちゃんはどこで犯人と会つたんでしょう？」

「そこまでは…でも、犯人が見た唯は笑顔でした」

笑っている唯を次の被害者にする。握っていた缶がペキッと鳴つ
た。スチール缶が凹んでいる。

零は服からまだ何か読み取れないか、作業を続けていた。

自分にできることをする。零はそれを実行していた。それなのに。
今はそれを見失いそうだった。なんのために警察官になつたのか。
何故、キャリアなのに現場に居続いているのか。水野を巻き込んで
まで、何がしたいのか。

「水野。俺はできるかな」

「できるよ。君が信じるもの貫き通せばいい」

幼なじみであり、親友と呼べるほど気が合つ水野が言つた。

耕から事件の資料を受け取り、唯たちが来るまで読み返した。

5 未来

「次に狙われるのは私…」

零が電話してから約三十分後、唯と亮は水野医院に到着した。普通に来るなら四十分はかかる。十分の短縮は、どれだけ急いで来たかを示していた。

いつ起こるかわからない次の犯行。唯が扉を開けて「お久しぶりです」と笑顔で挨拶したとき、安堵の息が漏れた。

この笑顔を。守り通してみせる。

一通り事件の説明をした後、沈黙を破ったのは唯だった。

「自分のことは予知できないんですね」

未来予知。不知火唯は一年以内の未来を知ることができる。それは『生きているモノ』に限られ、植物も含まれる。服や建物など無機物は対象外で、犯罪を防ぐ効果は期待薄だった。

対象である生きているモノ。その中に唯自身は含まれていない。

「まあ、私で良かったと言つべきですね」

「唯？ 殺されるかもしれないんだよ？」

唯の隣に座る亮は、いつもと変わらない様子で尋ねた。唯が冷静でいるからだ。次の被害者かもしれない唯が動搖していないのなら、周りが騒いで意味はない。

唯は亮の手を握った。

「一年後も、亮の傍に私はいるから。だから、私は死ない」

それは確信だった。未来を変えることもできるが、それは『唯が望んだ』ときだけで、唯が見た未来は絶対だった。

だから、唯は殺されない。

「殺されなくとも、何をされるかわからない。唯、俺に君を守らせてくれないかな」

「異さん…」

自己満足だとわかつていた。ただの身内鬱廩だ。それでも唯は、

唯たちだけは傷付けたくなかった。人と違う能力を持ち、そのため何度も裏切られながらも、能力を使って助けようとする彼女たちを。

あのとじき出来なかつたことをやんりうとしてるわけじゃないけど。

「じゃあ、僕たちの家に泊まつてくださいね」

零は無表情で言った。唯は両手を合わせて「それ、イイ！」と贊

成し、亮は苦笑して頷いた。

この子たちは。思わず笑みが漏れた。

「それが一番良いんだけど。迷惑じゃないんだ？」

「迷惑だなんて。あーでも怜香がいますけど」

怜香。源怜香はテレパスで、人の心が読める。接触すれば確実だが、強い思念は距離が離れていても聞こえることがあるらしい。

怜香といふためには、自分の思考を知られるのを覚悟しなければならない。怜香はむやみやたらに思考を覗いたりはしないけど。「それは気にしないよ。じゃあ、お世話になろうかな」

「はい。よろしくお願ひします」

唯に会わせて零と亮は一礼した。

「同居はどうですか?」

耕は手土産にゼリーを持って、唯たちの住むマンションに来た。捜査を耕と二人組で行っているため、耕の出勤場所はここになる。土産持参なのは、怜香のためだろう。

「新鮮だね。家族つてこんなものかも」

昨日一緒に帰つてから今まで、演技は必要なかつた。怜香に事情を説明した後、零が作った夕食を食べ、順番に風呂に入つて寝るまで談笑していた。事件の話はなく、ただ本当の家族のように。

「私たちは擬似家族ですから。私は本当の親に受け入れられなかつたから母の弟夫婦の養子になつて、今はシェアハウスということですこに住んでます。私にとってはここが『帰る家』なんですよ」

唯の家族のことは聞いたことがあつた。聞く限りでは、こんなに明るく、優しいままでいられるのが不思議なくらい、唯は周りの環境に恵まれていなかつた。両親からも気味悪がられ、味方はゼロに近かつたはずだ。養子になつたのは高校入学前で、それまでにさまざまな悪意を受けてきたはずで。それなのに。

本当の家族を知らないのに、本当の家族のよつな仲間を作ることができる。怜香にとつては母親的な存在だろう。

「俺も養子だけどね」

「吳さんも、ですか?」

「俺の両親はもういないよ。殺されたんだ」

簡単に言えた。

怜香や零に不意打ちで知られるより、自分で言う方が良いと思つた結果だ。耕もいるし、言つには良い機会だつた。

俺に関わる限り、リスクは付き纏う。

7 名字

「父親の海外出張でアメリカに住んでたとき、テロがあつてね。死者57人の中に両親が含まれていた。俺はそのとき学校に行つてて助かつたんだけど」

「その犯人は……」

「自爆テロだつたからね。まあ、そこで人生は変わったよ。両親は天涯孤獨だつたから俺の身内はいなくて。引き取り手がなくて、俺の学力を買つてくれた今の父親の養子になつたんだ」「呉さんのお父さんって……」

「警察上層部に対して意見が言える地位にいる人だよ」
具体的な名前は伏せた。伏せたところで意味はないのかも知れない。「呉」という姓がある組織を結びつけていた。

それに以前、水野がほのめかしたことがある。俺のバックの力は大きすぎて、影響力が強い。

「有難う」ぞいます。零と怜香のために話してくれたんですね
唯が困つたように笑うのを笑みで返さなかつた。そんな綺麗な理由じゃない。今まで言わなかつたことが罪であるかのように。
唯たちの前で嘘なんてつけないのに、隠し続けていた。

「それもあるけど、他にも理由がある」
「他にも?」

「『呉』の名前は悪意を呼ぶんだ」

大きな名前ほど背負うリスクは並じやない。養子という立場が父を頼るのを躊躇させ、自衛するしかなかつた。

無関心であるのが一番で。妬みや羨望に気付かない振りをして。甘い言葉や暴言には反応しないようにして。暴力に対抗できるように護身術は身につけて。

『傷付く』という意味なんて忘れた。

そんな中で唯一水野だけは友人としていてくれた。水野は俺の過

去も、親も関係なく付き合ってくれた。まあ、あの性格があるけども。水野も有名な病院の息子だけど、『呪』のような影響力はない。

超能力者たちから視線を逸らさなかった。覚悟は出来ている。

「そんなことですか？」

「呪さんにお会い前から犯罪に巻き込まれたことはありますし。今更というか」

「問題ないよね」

零、唯、亮が順になんでもないかのように答えたのに対して、声が出なかつた。お前のせいだと。巻き込まれたんだと。何度も責任を押し付けられたのに。その度に裏切られたのに。

受け入れられるというのはこんなにも涙が出そうなくらい嬉しいものだつたんだ。

耕に言われたのを思い出した。

「唯が狙われる理由はそこにあるんですか？」

今まで黙つて話を聞いていた怜香が真っ直ぐ見て訊いた。
忘れていた。怜香の前では、あまり過去のことを思い出してはいけない。知られても構わないが、知ることで負担になるようなことはしたくない。

「わからないんだ。犯人が唯を狙う理由があるのかさえ。無差別なのか、理由があるのかわからない犯行だからね」

7 名字（後書き）

「水野がほのめかした」のは「予定犯罪」にあります。

被害者の接点が見つかっていない現段階では無差別殺人であると考えられている。だから、水野の報告を聞いたときに『また無差別殺人の被害者』だと思った。零に過去透視をやつてもらえば接点が見つかるかもしれないが、それには時間がかかりすぎる。

「犯人が見た唯ちゃんは笑っていたんですね？」唯ちゃんが笑っていたということは、親切にされたか、してあげたことがありますね」

「そうなるだろうね。でも、唯に心当たりはない」

「唯ちゃんと会ったときの犯人は、零くんが透視したときと同じだつたんでしょうか。変装していた、とか」

その可能性はある。盲点だった。零の力で犯人の顔がわかつたら、特定してしまっていた。

犯人が変装しているなら。どちらが本物なのか。それともどちらも偽物なのか。

「被害者は殺されている。それなら変装する必要はない。被害者が見た犯人が本物かな」

「そうですね。早くモンタージュを作らないといけませんね」

耕は零に目配せして移動した。耕は似顔絵を描くのが得意だった。本職には劣るが、モンタージュ作成には十分だ。

一人を見送り、唯と向き合った。

「君が動けば未来が変わるんだったね」

「はい。だから、『一年後も無事にいる私』を実現させるためには私が行動しないことが絶対条件です」

唯が俺や零の未来を見れば、自分がどういう風に助かるかわかる可能性が高い。けれど、それが『行動』に繋がる。

唯が確実に助かるには、唯はこの事件に関わってはいけない。

「じゃあ、唯は絶対に一人にならないこと！私も一緒にいるからね

！」

怜香がグッと握り拳を作ったのを唯は笑顔で見ていた。
何も回避できていないのに、このときはそれを忘れていた。

人が傷付くのが嫌で。

簡単に失える命だからこそ無くなるのが怖くて。
決心したのに。決心したつもりだったのに。
後悔しないことなんてないんだ。

「君は人を助けることなんてできないさ」

澄んだ声が鼓膜を透り抜ける。

「君にできることは起こった事を解決するだけ。誰かが犠牲になる
のさ」

色素の薄い瞳が細められた。

「偽善なのか自己満足なのか。君はそつやつて自分に嘘を吐く」
掴まれた左腕が痛い。

「認めな。君は傷付ける側の人間だ」

9 志乃

「吳さん！」

聞き慣れた声に意識が浮上した。唯と零が昼食を作つてゐる間に少しウトウトしてしまった。

「耕？」

「だんだん苦しんでいるように見えたので…大丈夫ですか？」心配そうに見る耕に「大丈夫だよ」とだけ返した。

久しぶりに見た。

7年前のあの血の世界。大学の友人であり、ゼミでは共同論文を書いた仲である彼。彼は今どこにいるのだろうか。今もどこかで人を傷付けているのだろう。自分は一切手を汚さず、人を操つて犯罪を実行する。彼なら自殺させることだってできるはずだ。

今までに何度も彼が関わった、又は関わったと思われる事件を担当した。結末は全て残酷で、誰もが傷付いて、誰も救えなかつた。いつも関係者全員の人生が狂わされる。日常が何だったかさえわからぬほどの崩壊だった。

彼に罪悪感はない。罪だと思つていない。

「耕、この事件には志乃が関わっているかもしねれない」

「！し、のさん…ですか」

「夢の中に出てきた人ですか？」

怜香と目が合つた。怜香は見つめてしまった。俺の過去を、夢として。怜香に伝わるほどの強い感情が伴う、志乃との過去。

そんな状況で、今更隠そうとは思わない。

「そう。彼のストーリーが見える気がする。唯が狙われるのは偶然じゃないのかもしれない」

「それは吳さんのせいじゃないです。…『志乃』って人、見たことがありますね…名前も聞いたことがありますね」

志乃の名前は新聞には載らない、報道されない名前だった。飽く

までも犯人は実行犯で、志乃の計画だとは立証できないようになっている。

もちろん顔を知る機会なんてない。

「誰かの心を読んだときに出でてきた、とか」

「いえ、直接会つてます。：研究所？」

怜香の顔が瞬時強張つた。それでもなんとか思い出そうとしている。

研究所。超能力の片鱗を見せた者が一度は行くことになる施設だった。唯も零も亮も行つたことがあると言つていた。そこで行われるテストは巧妙で、力を隠すのは大変だつたらしい。

力を隠す理由は、超能力者として認定されないためだ。認定されたら最後、世間から隔離され、力を利用される。その扱いは道具と同じで、末路は生ゴミだった。納骨なんてない。しかし、表向きは家族には超能力を有効に活用できる、本人にとつて幸せな施設として説明されている。家族には高い補助金が支給され、裏の顔は巧妙に隠されていた。

唯たちがその末路を知つたのは、その超能力があつたからだつた。唯は自分が施設に入つた後の生活と、職員の未来を見て、零は施設で起こつた過去を見て、怜香は職員の心を読んで知つた。亮は両親が別居を認めなかつたため、施設に入らずに済んだらしい。

その研究所は志乃と関係あるのか。

「『君は隠すのが上手いね』。そう、テストの時に言われました。…その時にあの人は『志乃』と名乗りました。私が研究所に行つたのは4年前です」

「志乃が研究所にいた…」

有り得ないことではない。彼にとつて超能力者も駒になる。もし、そこで何かを見つけていたら。協力者を得ていたとしたら。

きつと被害は拡大する。

「私があの人を覚えているのは、あの人人が今まで出会つた誰よりも純度の高い悪意を持つていたからです。…あの人人が今回の事件に関

わっているとしたら最悪ですね」

怜香は心が読めるからこそ、志乃の本質がわかる。きっと俺より理解しているだろう。

『純度の高い悪意』という言葉がそれを明確に示している。

「あの人気が関わっているなら、私は足手まといになりますね」

「精神を攻撃するだろうね」

一番有効な方法を取るだろう。怜香は下唇を噛んだ。助けたくても助けられない。その悔しさは理解できる気がした。

今までの被害者と同等に扱わないといけないけれど。それでも唯だけは何があつても守りたい。

『『志乃の計画』だと考えて行動しよう。それなら、俺が唯と一緒にいるところに犯人が現れる。それが一番残酷だからね』

隙を見つけるのが上手くて
心の隙間にも入ってきて
済んだ声が心地よくて
誰も警戒しない男

唯をどんなときも一人にしてはいけないとわかっていたのに

「僕の計画だとわかつていたのにな？」
そう言われている気がした。

「唯がいなくなつた！？」

亮の荒げた声が胸に刺さつた。怜香は顔色が白に近く、震える。その怜香の肩に左手を置き、零は右手をこちらに差し出した。

「唯がいなくなつた場所にあつたものを」

「…うん、吳さんは悪くないです。俺だつて、きっと防げなかつた」亮は頷いて、零と代わつて怜香の肩に手を置いた。零に現場に落ちていたハンカチを渡した。

唯のハンカチ。唯は女性用トイレから姿を消した。だから、亮も自分では防げなかつたと思つていいのだろう。デパートのトイレで、一瞬の隙を狙つて。

犯人は女性と言われていたのに。しかも変装までしている。それには加えて、志乃が関わっているかもしれないのに。

零の過去透視の様子を見ていると、急に零が顔を歪めた。

「志乃！… 唯は会つていたのか！」

「志乃！？」

嫌な予感は当たつていた。

零が声を荒げるのを初めて見た。

「僕が過去を見る前、吳さんが一緒に住む前に、唯は志乃に会つています。… 唯は自分が狙われることを知つていたのか」

「俺が早く気づいていれば…」

「いえ、僕が唯の過去を見れば良かつたんです。狙われるつてわかっていたんですから」

互いに能力を使わないことは、彼等のルールだつた。能力を使うことによつて起こる弊害を知つてはいるからこそ、互いの領域を守る。それを逆手に取つたのは志乃だからこそその策略だつた。

「零。志乃是条件を提示しているはずだ。アイツは何を望んでいる？」

零は視線を逸らした。珍しい。今まで弱いところを見せたことがないなかつた。常に冷静な零でさえ、志乃に振り回されている。

「吳さんが一人で『約束の場所』に来る」と、です

「『約束の場所』……」

行きたくなかった。あの場所で一度、心を揺さ振られた。握手を求めた右手を拒めたのは、ただ動けなくて手を伸ばすことができなかつたからだ。

あの場所で、もう一度同じことを言われたら。

「吳さんは大丈夫です。だってあの頃とは違うでしょう？」

怜香の幼い声が、不安を拭つた。

そういえばさつき、怜香には過去を見られていた。あの場所で言われたことを見た怜香が大丈夫だと言つのなら。今は昔とは違うとわかっているから。

「じゃあ、行つてくるね

「吳さん！」

『約束の場所』で、唯は駆け寄つて來た。拘束はされていなかつた。ただ、話しているだけのようだつた。通りすがりの人を見ても、よくある光景だと思うだろう。

約束の場所。それは治安が悪いことで有名な公園だつた。昼でも建物に囲まれて薄暗く、大きい通りから外れているため立ち寄る人もいない。少し離れたところに新しい公園が作られたため、この公園を知る人も少なくなつていた。

「大丈夫だつた？」

「薬をかがされたくらいです。連続殺人犯の女性からすぐに志乃さんに引き渡されましたから」

「今回は秀に会うためだつたからね」

志乃是好青年の笑顔を作つた。

昔と変わらない。いや、昔よりタチが悪い。あの頃から落ち着いた雰囲気を持つていたが、今は完璧な仮面が出来て一層『良い人』に見える。

名前で呼ばれて、一瞬だけ懐かしく感じた。

「こつちに来る気になつた？」

「まさか。君こつちに来る気は？」

「冗談。そろそろ認めな？」

志乃是楽しそうに笑つた。

勝ちを確信していよいよだつた。その選択しかないような。正しいのは自分の方だと。

伸ばされた手が。

「吳さんは志乃是違います」

凜とした声は誘惑を断ち切つた。

そつと繋がれた手の温もりが、思考を呼び戻す。

「唯、君は知らないんだ。秀がどんな人間か」

「蓮…！」

「…懐かしい呼び方だね。秀、君は『吳』の姓がなくとも不幸を呼びよせる。君の周りの人は不幸になる」

唯の手を振りほどいた。

志乃、いや蓮の言うことは正しい。両親の死以前にもその兆候はあつた。始めは飼っていた犬が。可愛がってくれた祖母が。仲が良かつた友達が。

交通事故で死んだ。

一度目は不運、二度目は偶然。しかし三度目は。止めは両親の死だった。

それからも周りで傷害などは何度も起こった。高校ではクラスメイトが自殺した。

水野も一度、交通事故に遭っている。
そんな中で蓮だけは無事で。

「志乃さんと一緒にいたら変わるんですか？ 幸せになれるんですか？」

唯の声は耳に良く通る。防ぐことができないほど、まっすぐ。

「私が未来を保証しても、ですか」

思わず唯を見た。視線が合つ。

唯の見る未来は確実に起ることで。昔は不安定だつた予知も、今では『唯が望まない限り』変わらない。

唯の保証する未来。

「私が守ります。吳さんが呼び寄せる不幸を回避させます」

「…君は殺しておくべきだった」

蓮は珍しく不快そうな顔をした。口元だけを歪めた笑みは初めて見るもので、蓮の計画が崩れたことを表していた。

唯が見た未来では、唯は生きていた。

「君に唯は殺せない。そして、唯がいる限り俺は君の敵だ」

「君のことを一番理解しているのは僕だよ。秀、君以上にね」

「そうだろうな」

肯定すると思つていなかつたのか、蓮は驚いたようだつた。返答が遅れた。

「そう思うなら…」

「それでも俺は運命と戦う」

逃げようと思つても逃げられないのなら。他人の力を借りて戦うことには決めた。力を貸してくれる人がいるから、戦える。

自分自身と。悪意と。

許されたいなんて思わないから。だから。

「ハツ！ まだ偽善者振るんだな。他人を巻き込んでまで」「巻き込まれているんじゃありません。これは私が望んだんです。まだ返せていない借りがありますから」

唯はにっこりと笑つて蓮に背を向けた。話は終わり、といつかの
よつて公園の出口に向かう。

蓮は楽しそうに、幸せそうに笑つた。

「唯、君の見た未来は絶対じゃない。僕は超能力に影響しない存在
だからさ」

「影響しない…？」

初めて聞いた。蓮は何でもないかのよつて軽い口調で、無邪気に
笑つた。

「過去は見えない、心は読めない。僕には干渉できないのさ。だか
ら、僕が関わる未来は不確定になる」

切り札を出した蓮は余裕の笑みに変えた。

超能力を消す能力。零の従兄弟は『言葉で打ち消す』といふ能力だが、決定的に違う。蓮が特別何かが出来るんじゃなく、蓮に特別に何もできない。

亮のサイコキネシスも通用しない。

確かに、玲香は『純度の高い悪意』としか言つていなかつた。

「だから唯を殺すことはできるんだ」

「俺が仲間になれば良いのか」

搾り出した声は掠れていた。唯が未来を約束しても、蓮はそれを変える。未来を見る唯を消そうと考えるのは当然だった。

俺が選べば、皆の未来が約束されるなら。蓮の近くにいれば誰かが傷付くのを阻止できるかもしれないな。

「呉は君とは違うよ」

耳に馴染んだ声が後ろから聞こえた。

「君に出逢う前から呉を知つていてるからね。呉は誰かを傷付けるんじゃない、守る側の人間だよ」

振り返ると水野が公園の入口に立つていた。唯とすれ違つときにはか囁き、唯は止まることなく公園を出ていった。

唯はいい方が良い。蓮と長く関わらない方が良いに決まつてる。

「君も交通事故に遭つたのに？」

「それだけだよ。それ以外、何もない。一度の事故をどうこうつもりはないよ」

水野はいつもの笑みを浮かべていた。

一度の事故。水野にとつては一度でも、俺にとつては不幸の一つにすぎない。

「『呉』の名前が呼びよせる不幸はあるかもしれないけど、呉自身は関係ない」

「蓮に超能力は効かないのに…」

「超能力がないのが普通なんだからね」

当たり前のことにハツとさせられた。

唯が見る未来は絶対起ることだけど、蓮はそれを不確定にする。でも、普通は未来なんてわからないものだ。

不確定になるだけで、悪くなるとは限らない。

「水野…余計なことを言つてくれる」

「呉の一番の友達は僕だからね」

蓮が忌ま忌ましそうに舌打ちするのに對し、水野は爽やかに返した。

蓮と水野。昔から一人の仲は最悪だった。水野がいたから、今、蓮の仲間になつていないのである。

「今日は諦めるけど、次は本氣でいかせてもらつよ」「蓮が意味深に一瞬首を指したのを見逃さなかつた。

俺の首に残る疵。蓮の右手首に残る疵。それがある限り、蓮を忘れるることはできないんだ。

蓮が堂々と去るのを追えなかつた。蓮を逮捕できる証拠はない。今頃唯の証言によつて捕まつている犯人は、蓮には繫がらないだろう。

使い捨ての駒。そんな蓮が執着する俺。

「どんな目的があつても、志乃の仲間にならうと思うな」

水野らしくない言葉遣いに、現実に引き戻された気がした。

犯行を防ぐために仲間になるのは間違つてゐる。そう言いたいことがわかつた。

「…そうだな。『蓮』は『志乃』だつたな」

名前で呼ぶと、まだ友人だと勘違いしそうになる。

志乃は敵。凶悪犯。そう思いたくない気持ちがどこかにあつた。理解者だと、そう思つたことがあるから。

「呉さん！」

幻聴だと思つた。彼は今、警察にいるはずだつた。

協力者で被害者でもある唯と一緒にいるはず。

水野の背後に、走つてくる耕の姿が見えた。

「なんで…」

「唯ちゃんが、ここに来ないといけないって。僕しかできない、ことがあるからって…」

全速力で走ってきたのだろう。犯人を追い掛けた後でも見たことがないくらい、耕は息を切らしていた。

「なるほど。耕がストッパーになるか」

水野は愉快そうにニヤリと笑った。

俺を見て首を傾げる耕に、意味がわからない、と首を振った。

水野は何に気付いたのか。

「志乃と直接関わったことがないのは耕だけだよ

「あー…うん」

「耕のことは調べてあるだろ? けど、直接会わないとわからないこともあるからね」

息を調えようとする耕の背中をバシッと叩き、水野は笑みを純粋なものに変えた。

「『『呉』』の名の力に頼ろうとしない。警官だから、危険はつきもの。超能力はなく、努力するタイプ。僕の性癖にも付き合ってくれるお人よし」

「確かに今までいなかつたタイプだ」

志乃の言つ『悪意を呼ぶ体质』は、耕には当て嵌まらなかつた。

耕は『呉』の名前を知らずにコンビを組むことになつた。事件遭遇率が高いことについては、警官であるから仕方ないと見える。

超能力はなく、努力を惜しまない性格で、水野の半分趣味である監察をしっかりと聞きとつていた。

そんな耕を、志乃是知らない。

「耕、次また志乃が来たとき、呉が志乃の仲間にならないように止めてくれないかな?」

水野が真剣に耕を見た。その目には、幼なじみである俺を心配するものと、友人である耕を信頼するものが混じっていた。

耕はすう、と大きく息を吸つた。

「吳さんが幸せを望なら」

吐き出された言葉は、承諾でも拒否でもなかつた。

「吳さんは志乃さんが必要なかもしません。でも、志乃さんの隣に幸せはありません。だから、吳さんが幸せを望むなら、僕は吳さんを止めます」

いつもと変わらない声だつた。いつもと変わらない優しい表情。全部、いつもと同じ。

柴田耕平は、こいついう人間だつたじやないか。

許されたいなんて思わないから。

でも、幸せを願つていたかつたんだ。

「…青い鳥、みたいだ」

「本当の幸せは近くにありました？ 確かに、今は幸せだと思える環境だよね」

水野がフフツと笑つたのに対し、笑顔を返した。

今、笑えている。

これが幸せなら。

志乃の誘いになんて乗らない。

「まだ、志乃が関わる犯罪は続く。まるで『擬似犯罪』のよう

「『擬似犯罪』、ね。確かに彼は自分は『犯罪を起こしている』実行犯じゃないからね」

「僕の近くにいる限り、志乃が計画する犯罪に巻き込まれる可能性は高い。それでも、君たちは居てくれるんだな？」

最後の確認だつた。引き下がるなら今しかない。今なら、志乃からも離れられる。

でも。それでも一緒にいてくれるというなら。

もうこの幸せを手放せなくなる。

「今更です。今までだつて、志乃さんが関わっている事件に遭遇し

たじやないですか」

「今更だよ。何年君の友達やつてると思つてんの」

二人の宣言が、思い出を塗り変えた。

志乃との『約束の場所』は、新たに水野と耕との『約束の場所』になつた。

この約束を守るために。

自分から離れたりはしない。

「まあ、腐れ縁つていうのもあるし」

「あの人にはそんな性質があつたなんて…」

水野医院で零に事件の事後報告をした。彼等が関わった事件は、全てを零に話し、零が必要な部分を唯たちに伝えるようにしていた。零は過去を見ることによって、犯罪に耐性がついている。関わった事件の最後を何も知らないよりは残酷でも知る方が良い、と言つたのは零だ。

「まあ、あとの過去なんて見たくないですけど」

「あーうん。見ない方が良い。心も読めないから、逆にその性質で良かつたかも」

志乃は獰奇的な犯罪者ではなく、全てを計算している。いくつもプランを立て、その過程を見る。それは楽しんでいるのでもなく、暇潰しのようだ。

「僕は直接志乃さんをどうこうする力じゃないから、あんまり影響ないかも?」

彩の咳きに、はつとさせられた。

彩の能力は『言葉で否定して打ち消す』。志乃に対して何かをするんじやなくて、志乃からの行動を打ち消せば良い。

「唯の未来を不確定にはするけど、彩の『否定』は現在の状況を塗り替える。しかも、彩は志乃に能力を知られていない」

零の珍しい笑みに、彩はニヤリと返した。

彩は研究所に行つていない。それは零が上手く立ち回つたからだろう。自分を犠牲にして、従弟を守つていたんだろう。

零が守つた彩を、志乃相手の切り札にするつもりはない。

「君は志乃に会わない方が良い。君だけは、志乃に関わらないでほしい」

「…助けにならないうことですか?」

「そうじゃないよ。既に僕と一緒に住んでることで、田は付けられていくと思うからね。能力まで知られることはないってことだよ」

水野の補足に頷いた。

彩だけは『能力者』として、志乃の対象にならないようだ。

守れなかつたものが多いから、今度こそ。

「あの人気が仲間にしたいほどの吳さんがいるんだから、大丈夫だよ」

零の言葉が誓いになつた。

もう、迷わない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7534e/>

擬似犯罪

2010年10月8日14時35分発行